

## 「 時空を超えて五七五 」

広重浮世絵の世界をたどる 【2】

江戸から四里半で 川崎 の宿。ここで旅人は多摩川を渡ります。

### ／ 葦の笛風に流して舟を待つ ／

...ご存じでしょうがあの時代、多摩川には橋はありませんでした。厄落として有名な川崎大師が目当てで、やってくる江戸庶民も多かった筈ですが、商用の旦那でも、武士でも、お伊勢参りの庶民でも、みんな船で渡りました。

かっこうよく葦笛を吹いて舟を待っている江戸っ子も、ぶっ裂き袴から大刀をのぞかせた侍もいました。

渡れば真言宗智山派の大本山・川崎大師です。

高尾山、成田山に並ぶ大寺ですが、なぜか広重は、風景の中にその大屋根さえも描いていません。今は、自動車の安全祈願をしてくれる別院もありますが、あの頃は長旅の無事・安全を懇ろに祈願しました。

渡し船、その数人の乗客、そして対岸の渡船場、その背後の風景.....寺の大屋根などがちらりとしていてもよさそうです。今でいえば、旅の絵はがきでしょう、これは。

実は、この 原画らしいのがあるんですが、広重のそれもほぼ同じ。原画は、ずっと淋しい感じなのです。広重はそれを、舟の大きさ、乗客の数などを変え、なんとなく楽しい感じにしてあり、遠景に富士をみせ、旅路の風景を創造しています。そこが、広重のウデの見せ場でもあるのでしょうねえ。

### ／ 春の川渡りて茶屋の奈良茶漬け ／

...なかなかの味で、大師様詣りの人にも、旅人に人気でした。

／夕東風や詣でてもどる舟の揺れ／

...旅人を見送って来た人もここまで。この見送り人、実は、品川宿での登楼を目当てにしていたなんてえのもいたようですね。

で、ナニしたの？なんてえ質問はやぼですよ。

さて、海沿いの街道を二里ほどゆくと、もう 神奈川 の宿です。

海には帆をかけた大船や荷船がもやい、街道沿いに茶屋・料亭が軒をつらねています。

その廊下棧敷から...

／棧(かけはし)や眺めは安房にとどきける／。

／春ねむし宿の二階の波の音／

...うつらうつらとして、あれ？、やがて黒船の時代です。神奈川は早くから、紅毛の異人がやって商売をはじめた処です。

／囀るや紅毛口説くかもめ髻／

...早速に、異人さんに仲良くなっちゃう娘さんいたんですよ。

／ラシャめんのカメの尾に舞う黒揚羽／

...紅毛人が犬を「カメ、カメ！」と呼びました。実は「来い来い」とか「おいで！」といったですが、日本人にはカメときこえちゃったんですね。

いやいや、これは時空旅行とはいえ時代が進みすぎましたねえ、広重の頃には、まだ黒船は来ていませんものね。

江戸時代の洋画家・司馬江漢に『東海道五拾三次』なる画帳がある。広重の『...五拾三次』は、これを原画としている。と、對中如雲・伊豆高原美術館館長は説く。原画というのと対比し、さらに詳しい説明・見解がのべられている。つまり、広重は東海道を歩かないで五十三次の絵を描いたというわけである。これは對中如雲著『広重「東海道五拾三次」の秘

密』祥伝社版で世に出ている。岩波書店の『保永堂版...五拾三次』にも「歩いていない」という研究・見解がでている。名所図絵などを利用して描いたという。

このシリーズは、それを追うものではない。全体の進行の中で、時折、それらの見解を利用させていただきだけ。つまり、「広重は東海道を歩かずに、あれを描いた」かどうかは、あまりこだわらない。

茅ヶ崎 山内重昭